

●藩政の歴史に触れる

藩政時代、薩摩藩の鹿児島城下から領外に出る街道の中で、「西目筋」と「東目筋」の二本の街道が最も重視されていた。西目筋は現在の国道3号、東目筋は加治木から牧之原に出て、都城、高城、本庄を結び、佐土原までの現国道10号に重なる山間部を通る道で、この東目筋を「薩摩街道」と呼んだ。

今、その薩摩街道のうち、高城町から高岡町和石(よれし)を通り、同町去川までが新しいウォーキングコースとして関心を集めている。高城町では昨年、生涯学習活動の中で初めて歩こう会を開き、また宮崎西高校は昨年、一昨年と二年連続してウォーキングを実施、藩政時代の歴史に触れた。

この区間は街道の中で最大の難所だった。ここを最初に開いたのは都於郡(西都市)に本拠を置いていた伊東氏。明応四(二四九五)年、

三俣院(高城、山之口、勝岡など)千町を手中にした伊東氏はその前線基地・高城との命脈を保つために、領内から高城に通じる道を開通させた。これが薩摩街道となった。

高城町側から街道をたどると。同町有水の岩屋野公民館に車を置き、歩き始めるのが一般的。岩屋野にはわらじなどを売る茶店もあったという。旅人たちはここから二里半(約十キ)以上の山道を前に、公民館近くにある熊野権現に無事を祈り、境内からわき出ていた水をくんで、わらじを整え、国見峠へと向かったとみられる。

国見峠に続く七曲坂の上り口に、「奉寄進御山神宮」と彫られた山之神が立つ。近くにあった番所役人・稲盛三左衛門が建てたものである。

坂を上ると、街道で最も高い国見峠。「御道中記」(嘉永六年・一八五三)、斉彬管内巡視の案内

書)に「此の地東目街道の内至極の高地。先年来御野だての場」とある。ここを通った十八代薩摩藩主・島津家久をはじめ、光久、斉彬なども茶菓も用意して野だてを行ったのだろう。

国見峠からは、尾根伝いの平たんな道が続く。和石近くになると眺望が開け、野尻の町が眼前に展開する。和石まではゆっくり歩いて約三時間。和石から終着点の国の天然記念物「去川の大イチョウ」がある去川関所跡までは約一時間。上り下りが長い。

自然石などの山之神六基、馬盗っ人防止の堀など歴史を語る遺跡を見ながら、自然林の中の歩行は楽しい。高城町では街道の案内板設置など便宜を図っている。

塩水流忠夫



昔そのままの雰囲気。歴史をかみしめながらの歩行は楽しい